

末黒野

すぐろの

8月号 (通巻816号)



青
嵐

小川玉泉

短冊の墨擦る八十八夜かな
蛙に目借られ日記の右下がり
人探しの市内放送大夕焼
古き葉に萌黄を重ね樟若葉

亭々と櫟の大樹青嵐

朝風の樹頭を飾り椎の花

アンテナを掠めぬ二羽の燕の子

大樹にも似ず細やかや樟の花

直ぐに抜け羽蟻の羽の灯をはじく

かまきりの生まれてはやも鎌かざす

客人へレースカーテン風はらむ

水玉を葉先に明けの菖蒲の芽

ほととぎす

松本三千夫

藤房の揺れて白髪を黴らるる
大でまり日を撥ねてをり弾みをり
物見岩残る城址や若葉風
灯台は真白きがよし夏来たる
母の日の妻へ二鉢カーネーション
子燕の揃ひもそろひ口揃へ
ビル風に吹き戻さるる夏の蝶
ほととぎす棚田たつぷり水張られ
たはたはと発つや代田の鴉二羽
憂さ捨てに来たる野の道黒揚羽
夜は背山昼は妹山ほととぎす
ほととぎす鳴き行く月の明るさに

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

夏はじめ

松田泰子

花の雨日はありながら横なぐり
赤ん坊の拳の中も花の屑
土かろく叩き花種蒔き終へり
お茶添へてふる里の色蓬餅
わが影の伸びゆく先のいぬふぐり
喪の家のこまごま咲きぬ沈丁花
春の風邪夏風邪となる暦かな
掘つて来し筍立てて見せにけり
牡丹散る人に告げたき話あり
花桐やまた昼月を見失なふ

イースター

森清信子

ふらここや行きてかへらぬことばかり
ほの白き闇をまとへる桜かな
吊橋の真ん中にまで花の塵
昼月の白より白き落花かな
永き日や母は多弁にして多才
倒木の多き峠や名残雪
眠気さし来ぬ一面の桃の花
ハンドバッグに小さくおさまり染卵
アボカドを割ればさみどりイースター
白雲を片寄する風竹の秋



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

花の雨

堺 昌子

谷戸の道右に左に野蒜摘む
百歳の叔母逝く宵や花の雨
西方へたたるる叔母よ春の雨
姿見せ杜に四声の初音かな
山桜夕日のいろを目にあづけ
岬鼻やひとつに霞む海と空
富士塚の頂上きはめ若葉風

著莪の花

中野久雄

ぼつかりと浮かぶ綿雲山笑ふ
風なきに草木匂へり春の闇
花は葉に人影見えぬ出城跡
抜け道の土の湿りや著莪の花
茅葺きの里の静寂や麦の秋
筒鳥の声に耳貸す山毛櫨の森
山里の風清すがし田植どき



鱧料理

西川みほ

漁り舟水面へ消ゆる遠がすみ
吹かれ立つ断崖の松芯太し
臙より鳥語零るる淡路島
日照雨過ぐ四方の山々新樹光
書きさしの文をまとむる日永かな
菖蒲湯に入れ赴任地へ子を発たす
ひとくさり有りて運ばる鱧料理

金 蘭

森 清

堯

入海の光もみ合ひ桜東風
差し潮の河口混み合ひ花筏
重さうに鞆負ふ児ら八重桜
昼月へ一直線や揚雲雀
風韻の朱の長屋門若みどり
金蘭や鳥語しきりの杣の径
倒影の富士や田植を待つばかり

無人駅

吉田きみえ

峡泊り辛夷明かりの長廊下
無人駅客なごまする紅つつじ
堰越えてふたたび生まる花筏
靴の紐締めて径の山椿
蓬摘みままごとの子の独り言
昨夜の雨上がりて明けの紫木蓮
喪歸りの子等との家路月臙

春の塵

石黒興平

狛犬の阿の口に入る春日かな
金箔の羅漢の目尻花の冷え
胸筋に春の塵おく仁王かな
畳皺多き古地図や目借時
老木の洞に芽吹ける楓かな
藤棚の風むらさきに春づけり
展帆や帆桁に揃ふ日焼顔

青炎集

小川玉泉選



横浜 鍋島武彦

横浜 小田嶋野笛

彩と香の春の百花や華道展
百態の羅漢の黙や花の昼

沖走る水脈の眩しや夏に入る

幟立ち風林火山はためげる

駆足に過ぐる歳月花は葉に

廃校の庭や鶯老いを鳴く

横浜 高橋 明

横浜 嵐 弥生

民宿の目覚めうながし囁れり

子燕を鳴かせ交番いつも留守

日も風も包み込みたり袋掛

切り貼りの障子の庫裡や柿若葉

悪戯に鐘つく幼夕牡丹

遠く噴く阿蘇手庇に麦の秋

眼裏に夜桜残し長湯かな

さへつりを追うて動けり猫の耳

田一枚一枚ごとに夏来たる

コクリコを庭に満して寡婦たのし

鳶紬の袖ひるがへす青嵐

車窓いま代田の景を賜りぬ

張る枝に遍く房や藤古木

藤房に日照雨の雫残りをり

暮れ泥む空に明るき花水木

春愁や母国はるかの異人墓地

惜春や無縁めきたるクルス墓碑

大方は蒼天さしぬ椽の花

横 浜 上 月 智 子

足裏に黒土柔し鼓草

鉄棒にさか上がりの子花吹雪

タンカーの著き明かりや月朧

芳しき香に包まれて甘茶仏

子の手形押し紙製の鯉のぼり

小心は我かお主か蛇逃ぐる

横 浜 前 原 マ チ

鈴懸の古きまり揺れ目借時

春光や御堂に笑まふなで仏

よちよちの児や雛げしの風の中

溪谷の岩打つ流れ山法師

新緑の木洩れ日を浴び無蓋バス

若葉風貸し自転車に園巡る

横 浜 新 堀 満 寿 美

鶯の次の声待ち坂登る

囀りにつまれ目指す峠かな

裏庭の白藤にふれ下校の子

竹秋の葉を蹴散らしつ鴉たつ

鶯遊ぶ岸や青あを藍若葉

初物を好みし妣にまづ新茶

横 浜 高 木 邦 雄

げんげ田のあふるる花の鋤かれをり

山吹の水面に零す黄金かな

子規俺の蟻螻ひかる入日かな

丹沢の樹海湧き立つ青嵐

老鶯の声のこだまや峽の径

木洩れ日の零るる林著我明かり

横 浜 小 沼 糸 み 子

一田玉の軽さ重さの四月来ぬ

歩を合はず共に八十路の花見かな

満願の目黒不動や花の風

父親の機嫌のよろし子供の日

柏餅買ひぬ短歌の添へられて

あぢさゐや寄りて離れて写真展

横 浜 占 部 美 弥 子

帰郷せる子の母めくや春休み

進学の高校ここと子の笑顔

母の忌や逝きし日のごと花の雨

白きはむる垣根の躑躅すがすがし

浜風に蔓をゆるがせ鉄線花

潮の香やフランス山の椽の花

耕 土 集

松本三千夫選



満開の躑躅を出入り熊ん蜂

川崎 石坂 勝

古民家の棟の土締め花あやめ

背丈低き朴の花あり覗きける

地を駆くる鳥追ひ切れず若葉雨

緑陰の外苑通りピザ店へ

横浜 塩川 君子

初つばめ柳の舗道まつ直ぐに

藤房を見上げて触れて笑みこぼす

ジャスマインの香を連れ帰る夕べかな

小判草思わず振るも音かすか

箸立てに詰まる割箸心太

宮地 静雄

芽吹く木の風の音聞く長湯かな

山吹を手折りて一枝妻の胸

目を合わせ両手に握手聖五月

茶畑の景色も届く新茶かな

手を取りて歩む参道若葉風

田中 繁夫

落日の空を惜しむや揚雲雀

巢造りの燕と話す子等五人

老鷺の声老練に路地の風

陸橋に届く葉桜小さき実も

好きな薔薇マクロに撮りて空の青

布施由岐子

カンバスに春野とり込むベレー帽

春の宵出雛子の無き蕎麦屋寄席

アベックとカッパルの行く花の道

かをり良き菖蒲揃へて朝湯かな

古茶淹れて互に八十路ふり返る

横浜 山口 登

連山を映す代田の繋からず

春山へ心急がるる写真展

風光るコバルト色に湖光り

桜糞降り残しをり峰の寺

八千歩足湯へ晒らす花疲れ